

蜘蛛となめくじと狸

宮沢賢治

蜘蛛と、銀色のなめくじとそれから顔を洗ったことのない狸とはみんな立派な選手でした。

けれども一体何の選手だったのか私はよく知りません。

^{やまねこ}山猫が申しましたが三人はそれはそれは実に本気の競争をしていたのだそうです。

一体何の競争をしていたのか、私は三人がならんでかける所も見ませんし学校の試験で一番二番三番ときめられたことも聞きません。

一体何の競争をしていたのでしょうか、蜘蛛は手も足も赤くて長く、胸には「ナンペ」と書いた蜘蛛文字のマークをつけていましたしなめくじはいつも銀いろのゴムの靴^{くつ}をはいていました。^{また}又狸は少しこわれてはいましたが運動シャツポをかぶっていました。

けれどもとにかく三人とも死にました。

蜘蛛は蜘蛛^{くもれき}曆三千八百年の五月に没^なくなり銀色のなめくじがその次の年、狸が又その次の年死にました。三人の伝記をすこしよく調べて見ましょう。

一、赤い手長の蜘蛛

蜘蛛の伝記のわかっているのは、おしまいの一ヶ月間だけです。

蜘蛛は森の入口の^{いりくち}檜^{なら}の木に、どこからかある晩、ふっと風に飛ばされて来てひっかかりました。蜘蛛はひもじいの^{がまん}を我慢して、^{さっそく}早速お月様の光をさいわいに、^{あみ}網をかけはじめました。

あんまりひもじくておなかの中にはもう糸がない位でした。けれども蜘蛛は

「うんとこせうんとこせ」と^い云いながら、一生けん命糸をたぐり出して、それはそれは小さな二銭銅貨位の網をかけました。

夜あけごろ、遠くから^か蚊がくうんとうなってやって来て網につきあたりました。けれどもあんまりひもじいときかけた網なので、糸に少しもねばりがなくて、蚊はすぐ糸を切って飛んで行こうとしました。

蜘蛛はまるできちがいのように、葉のかけから飛び出してむんずと蚊に食いつきました。

蚊は「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」と

あわ
哀れな声で泣きましたが、蜘蛛は物も云わずに頭から羽からあしまで、みんな食ってしまいました。そしてホッと息をついてしばらくそらに向けて腹をこすってから、又少し糸をはきました。そして網が一まわり大きくなりました。

蜘蛛はそして葉のかげに^{もど}戻って、六つの^め眼をキラキラ光らせてじっと網をみつめて^お居りました。

「ここはどこでござりまするな。」と云いながらめくらのかげろうが杖を^{つえ}ついてやって参りました。

「ここは宿屋ですよ。」と蜘蛛が六つの眼を別々にパチパチさせて云いました。

かげろうはやれやれというように、^す巢へ^{こし}腰をかけました。蜘蛛は走って出ました。そして

「さあ、お茶をおあがりなさい。」と云いながらかげろうの^{どうなか}胴中にむんずと^か噛みつきました。

かげろうはお茶をとろうとして出した手を空にあげて、バタバタもがきながら、

「あわれやむすめ、父親が、

旅で果てたと聞いたなら」

と哀れな声で歌い出しました。

「えい。やかましい。じたばたするな。」と蜘蛛が云いまし

た。するとかげろうは手を合せて

「お慈悲じひでございます。遺言ゆいごんのあいだ、ほんのしばらくお待ちなされて下されませ。」とねがいました。

蜘蛛もすこし哀れになって

「よし早くやれ。」と喋ってかげろうの足をつかんで待っていました。かげろうはほんとうにあわれな細い声ではじめから歌い直しました。

「あわれやむすめちちおやが、

旅ではたと聞いたなら、

ちさいあの手に白手甲しろてこう、

いと巡礼じゅんれの雨とかぜ。

もうしご冥加みょうがご報謝と、

かどなみなみに立つとても、

非道の蜘蛛の網ざしき、

さわるまいぞや。よるまいぞ。」

「小しゃくなことを。」と蜘蛛はただ一息に、かげろうを食い殺してしまいました。そしてしばらくそらに向いて、腹をこすってからちよつと眼をぱちぱちさせて

「小しゃくなことを言うまいぞ。」とふざけたように歌いながら又糸をはきました。